

現代短歌の評価 佐佐木頼綱

「短歌往来」で田中教子が連載している「うたの小窓から」が少し話題になっている。田中は今話題になっている現代短歌を上げ、茂吉や文明、寺山修司や前登志夫の歌と比較しながらリズムや修辭の是非、内容や表現の新しいさを検討(基本的には否定)している。

連載第一回では永井祐、雪舟えま、斉藤斎藤の歌をあげ永井祐の〈あの青い電車にもしもぶつかればはね飛ばされたりするんだろ
うな〉に対して「そうでしょうね」とうなずくしか無い。それは歌の素晴らしさに頷くわけではない。(中略)本当にこれでいいと思っているのか。」と断罪し、雪舟えまの〈ホットケーキ持たせて夫送り出すホットケーキは涙がふける〉に対して「この歌はナンセンスの感覚で詠まれている。『ホットケーキは涙がふける』という点に新味があるという人がいる。だが筆者には、奇をてらったわざとらしさとしか感じられない」と評し、斉藤斎藤の〈雨の県道あるいてゆけばなんでしょうぶちまけられてこれがのり弁〉に対しては「現代の若者の真実の姿がここに現れている」とする人がいるが、筆者にはそのような真摯な態度は見えず、またしても「さあ、新しい歌だ、驚け」と言われたようで興ざめするのである。(中略)定型に嵌めるということは、ただ珍しいことを言ったり指折り数え

れば良いというものではないのだろう。定型に合った斬新な詩的口語体を想像することが、現代の最優先の課題である」と論じる。

穂村弘、瀬戸夏子、佐藤弓生といった話題の現代歌人の歌をどんな上げて批評する田中の連載は無事に一年を迎えた。読者の反響も強く「楽しみにしています」「我が意を得たりと思いがながら読んでいます」「今の人の歌が失ってしまった短歌の特別さを思い出させてくれます」といった感想が届いている。また反論も出ている。「未来」11月号時評では高島裕は「雪舟の作は孤独な現代社会を生きる夫婦が希望が見えない中でお弁当をもたせている歌でありホットケーキは傷みと温みを湛えん強い愛情を感じさせる。」

「田中の鑑賞眼は、節穴であるというほかない」と記す。

高島の反論を読んで、「なるほどそういうことだったのか」と評価するか、「いやいや田中の論点の方が歌の本質だ」と反論するか。これは歌の評価のスタート地点なのだろう。最近話題になる歌は著名な歌人が歌を発掘評価し、それに賛同した周囲の歌人が歌を取り上げ、外部や世代差のある歌人が理解や批判をする前に「有名歌」になってしまっている場合が多い。本来は田中の連載の様な問題提議がされ、反論が出されて、そのやり取りを手がかりに多くの歌人が歌や問題点を理解して、やっとその歌が時代を捉えた良さなのか、普遍的な良さなのかの判断がされるのであろう。感情的な文体に批判も多いが嫌われ役を厭わずに連載執筆し、理解の一步を生んでいる田中の功績を評価したい。彼女の原稿とその反論を楽しむに編集作業をしている。

短歌の新しい表現や評価の問題は、専門的になりすぎて一般聴衆を失った現代音楽と類似する様に思う。次稿で比較し論じたい。